（2024 年 5 月 6 日）

第 46 回　赤松小三郎研究会　のご報告

日時：　2024 年 4 月 13 日（土）14:00～16:45
場所：　文京シビックセンター　４階 B 会議室
出席者：17 名

【配布資料】
資料－1　仮想　天才赤松小三郎を育んだ八木剛助～八木晴之さん
資料－2　幕末の薩摩藩と庄内藩の密接な関係→戊辰戦争の賞罰関係に影響を与えた～沓掛忠さん
資料－3　2024 年　第 11 回赤松小三郎講演会（案）～関良基さん
資料－4　「英雄たちの選択」と赤松小三郎～滝澤進さん

【内　　容】
Ⅰ．仮想　天才赤松小三郎を育んだ八木剛助（発表者：八木晴之さん）

仮　想
天才　赤松小三郎を育んだ八木剛助?!
高齢の幕末志士八木剛助と芦田家･赤松家の関係
Hp 用　解説版

八木晴之

2024 年 4 月 12 日開催発表会のスライドショウーの内容を研究会ホームページ用に編集した。当日はスライド方式で、大量の資料画像・表をアニメーション効果で約 1 時間解説した。全て文章化すると膨大な量の為、小三郎を育んだ**八木剛助に絞り簡素化して**まとめた。

1. プロローグ

A プロフィール1　今日の主役の一人 八木剛助
① 1801 年　誕生　父下級藩士与一衛門　母は小三郎の大叔母
② 1813 年　12 歳 上田藩校第一期生。小三郎の父芦田弥一郎と同期。藩校では生徒から教師に昇進
③ 1843 年　42 歳 西洋流砲術修行任命、43 歳で田原藩村上定平（西洋砲術指南役）入門西洋学全般学ぶ
④ 1866~7　65･6 歳 2 回に渡り長州征伐出陣。上田藩軍師役
⑤ 1868 年　67 歳 戊辰戦争で藩を官軍へ誘導
⑥ 1871 年　70 歳(明治 4 年) 小三郎暗殺の４年後、藩校兵学局教頭を辞し直後剛助死亡
　　●著書　「田原記聞」、兵学書「兵学筌蹄(せんてい)」他

B プロフィール2　発表者 八木晴之（八木剛助のひ孫）
① 1947　長野県丸子腰越生まれ(疎開先)、6 歳まで丸子育ち
② 1969　東海大学建築学科卒業、1973～2007 積水ハウス、2007～八木晴之デザイン研究室
③ 現在　八木正風の遺作(スケッチ･習作含む)画業の整理分類中（足掛け 40 年）
　　上田市へ寄贈目標に画業整理の傍ら赤松小三郎に関する資料作りに没頭中

C 経緯　最初に(俄か歴史探求者が作成したレポートですので悪しからず)
令和５年秋、父の画業を上田市と結び付けたいとの思いで上田人脈づくりを開始、赤松三郎研究会の存在を知る。それ迄小三郎に関して詳しく知らなかったが 11 月開催の講演会参加へ向け、ネット検索等すると血縁の可能性感触あり、さらに父母の遺品の書類書籍を読み込む。小三郎の偉大さを知ると共に八木家との関係が明らかに。(実質昨年 11 月からの５か月間の俄か作りです)

D 血縁の関係明確化　八木家と芦田家は親戚

剛助の父八木与一右衛門の妻須恵は芦田家から嫁ぐ(剛助の母)整理すると
八木剛助は芦田清次郎(赤松小三郎)の従妹叔父で剛助の母須恵は大叔母にあたる
【参照資料】上田市立博物館説明会用レジメ中赤松小三郎関係系譜に記述在り
レジメ作者は博物館小林利通氏と思われる。小文字手書きの労作。

E 仮想　小三郎はなぜ天才に

小藩上田で小三郎は何故才能を開花し万能の天才に成りえたか？
キーパソンが西洋砲術の先達で蘭学に造詣の深い**身内の従妹叔父の八木剛助と妄想**。両者を取り巻く群像の中、**剛助と小三郎を軸に作成した時系列年表を元にし、小三郎の天才への歩みを仮想**します。

以降、簡素化について
① 八木家関連はⓎで詳しく表記　但し長女たけ・養子兼助はカット　②芦田家関連はⒶ表記且つ箇条書き（小三郎研究会の他資料参照）　③藩主はⓂ表記　④共通はⓀ表記

2.　1770～1829 誕生から幼少期･藩校時代

Ⓚ八木・芦田両家とも 1706 上田仙石家と藤井松平家国替え時以来の丹波出石時代からの松平家家臣
Ⓨ1770 与一衛門、熊野権現近く八新町生まれ。山林方から川添方へ役替えし家格 9 石 3 人扶持と成る
Ⓐ同じ頃、芦田家 5 代目友章の妹須恵、木町で生まれる。芦田家家格 10 石 3 人扶持
Ⓚ両家とも上田藩に仕える 3 人扶持 9 石前後の暮らしぶりの下級藩士同士
Ⓨ1799 父与一衛門は川添方(河川・堤の管理補修)に出世を機に芦田家 4 代友宗に娘須恵との婚姻請願する
Ⓚ1800 与一衛門 30 歳 **芦田家友章の妹（須恵）を娶る。八木家芦田家は親戚関係**に
●小三郎の父勘兵衛は同じ年に生まれる。両家に祝い事が重なる
Ⓨ1801 八木剛助(金蔵)が誕生。与一衛門 30 歳
Ⓨ1808 1810 与一右衛門川除山林御普請御用掛に抜擢、江戸出府し奥鍵役申し渡される。この期間中与一衛門は和流砲術等を学んでいたと思われる
Ⓨ1811 与一右衛門は**単身赴任中家族を芦田家に預ける**
●剛助は幼少期から芦田家と家族同然の親密な関係を築いていたと想定される
Ⓜ1812(文化 9 年）松平忠固誕生
Ⓚ1813～1825 藩校時代剛助 12 歳　芦田勘兵衛 13 歳。共に藩校一期生に選ばれる
●藩校創設時からの二人は共に頭角を表し、生徒から教える側に昇進して行く長年の良きライバルで同士でもあったと思われる
Ⓨ1824～29 剛助は藩命で休学し江戸で和流兵法砲術等を学ぶ
Ⓜ1829 松平忠固（忠優）上田松平家養子

【参照資料】「八木剛助の背景」　滝澤良忠著　2006 年
この本は八木剛助の幼少期の家族の動向が詳しく描かれている。①芦田家との婚姻の経緯
②与一郎右衛門芦田家へ家族を預け江戸へ出府 ③藩校創設時紹介中に剛助と弥一郎が頻繁に登場。本書の主目的は八木剛助が表した苦心の兵学書と彼が生涯に渡り関わった藩校の紹介を目的としている。

3. 1830～1847 結婚から田原修行

Ⓨ1830 父与一右衛門藩より**屋敷を城北虎之口に与えられる**。剛助 29 歳 結婚。妻は八重
●剛助は八重と結婚しこの地で生活始める。**職場の藩校そして母須恵実家の芦田家はすぐ近くとなり両家の親密度深まる。**
Ⓜ1830 松平忠優 18 歳上田藩主に上田初入部
Ⓨ1831 父砲術世話掛へ、剛助 30 歳 数馬誕生
Ⓐ1831 芦田家に次男清次郎誕生（小三郎）
●剛助の長男数馬と芦田家次男清次郎(小三郎)は同い年！運命的関係を感じる。

Ⓨ1832 剛助 31 歳 和流砲術父子で藩主に披露。藩から褒賞与えられる。藩主忠優の印象に残る
Ⓨ1836 父与一衛門 66 歳で死亡。剛助 35 歳で家督相続 川除山林引受兼務
Ⓜ1836 松平忠優飢餓対策餓死者出さず
Ⓨ1836 剛助 35 歳藩主より天保の飢饉対策に命じられ 成果を上げ褒賞を得る
●剛助は越後表より 382 俵御買入れの成果を上げる。ここでも忠優は剛助の存在を目に留める
Ⓐ1837 小三郎 7 歳 植村半兵衛私塾でそろばんを習う
Ⓐ1842 小三郎 11 歳で文武学校に入学、儒学と槍術・剣術を学ぶ。兄柔太郎も藩校に就学。叔父植村重遠から兄弟で和算就学
Ⓨ1843 **剛助 42 歳 西洋流砲術修行任命（高齢抜擢）**当初江川太郎への入門予定
Ⓨ1844 剛助 43 歳 田原藩村上定平へ入門 長期の修行
●田原藩は上田藩主忠優と姻戚関係があり藩同士で八木剛助を村上定平の門人１号に。
1844 藩命「御内用」で田原藩へ。 剛介の田原藩行きは砲術披露・天明飢饉対策の一連の働きで忠優の目に留り、八木剛助へ期待し藩主自らの任命と妄想する
Ⓨ1845 砲術修行中多くの蘭書筆写し持ち帰り帰国後も兵学研究重ね、その**修行過程「田原記聞」を表す**
●村上定平の子照武が剛助を表した記録に「温和で文武を兼ねる、特に馬術に長ける」とある。余暇を惜しみ砲術を学ぶ。帰国翌年には上田で大砲鋳造に着手。後に江戸にて幕府より高島流砲術世話方命ぜられる　【参照資料】現代語訳は「上田市の人物と文化」(1986 年上田市立博物館）に掲載
●上田に戻り剛助は小三郎を始め子供たちに**長期修行で知った「西洋の学問の奥深さを、あらゆる学問を学ぶ大切さを」を語る**
Ⓚ1847 善光寺地震発生剛助母須恵家族一行善光寺詣中に地震遭遇。須恵怪我治療両家助け合う

4. 1848～1856 江戸藩邸時代ペリー来航

Ⓜ1848 松平忠優３６歳老中任命
Ⓐ1848～52 芦田清次郎 17 歳は剛助の勧めもあり**藩校から江戸の私塾 内田弥太郎塾へ入門**。同時期兄柔太郎も藩校から昌平坂学問所へ入学。清次郎は数学、天文学を５年間に渡り学ぶ。特に蘭語学に集中。その後、下曾根金三郎門下に蘭学、砲術を取得してゆく。剛助は二人を見守る。
●**【赤松小三郎先生 現代語訳版ｐ4 記述】**清次郎内田塾修行時代父勘兵衛からの書簡
「内田先生もよく飲み込んでおられるので、八木剛助からもその様に言っている、我慢が大事だ」
Ⓨ1849 剛介母須恵、妻八重、次々に死亡。その後上田から江戸詰め藩主の元へ
Ⓨ1850 剛助 49 歳 藩の方針に沿い最新の西洋砲術・兵法を求め象山塾入門。翌年数馬 20 歳 象山塾入門
●1852 江戸で八木剛助、数馬、たけは同郷身内同士の芦田家兄弟清次郎達と頻繁に交流と想定
Ⓨ1853 剛助はペリー来航時幕臣の供で観察実行。観察図示有。芦田兄弟も来航時浦賀へ行き観察報告
●**【参考資料】あらしの江戸城 1958 年　猪坂直一著に記述**
安政元年ペリー来航時剛助時の老中藩主忠優への剛助提言
万国の長所を集め鍛錬習熟し経済行き届き国内充実を図り
世界の強豪国を目指すべきその為には
①武器軍略の収集と人材登用で兵学校設立 ②財源確保の為無用制度廃止等財政改革
③ 国防のためは庶民からの徴兵制が必要 ④積極的な開港通商を各国と行う
④ 洋式艦船建造し航海習練し諸国と交易 ⑥金銀米から物産交易を目指す。
⑦交易で財力を増し世界の強国を目指す
Ⓐ1854 清次郎 23 歳 上田赤松家養子縁組、同年藩校数学助教を辞し江戸の勝海舟門下生へ
Ⓜ1855 松平正優老中罷免
Ⓨ1855 剛助長男数馬 24 歳 象山塾にて蘭書翻訳中に病死
Ⓐ1855 清次郎 24 歳 藩徒士として長崎海軍伝習所入所、学生長任命、勝従者。
伝習所にてオランダ人より語学、測量、騎兵学、航海術等学ぶ
Ⓨ1856 剛助長女たけ 19 歳 佐倉藩士荒木家次男兼助(佐久間象山塾塾生高島流砲術免許皆伝)と養子縁組

5. 1857～1866「兵学筌蹄（せんてい）」完成・小三郎と長州征伐

Ⓜ1857 安政 4 月年松平忠優 46 歳 老中再任（次席）･勝手掛、忠固と改名

Ⓨ1858 剛助 57 歳 かねてより執筆「兵学筌蹄（せんてい）」完成、藩主の出版許可得る。**抜粋を藩主から将軍家茂に御上覧「上田藩に良き軍師有」と藩主忠固言葉頂く。**その後の幕府の陸軍創設の一助になる。 この書は単なる兵学書では無く財政改革、市民徴兵、開港通商、産業振興交易推進に及ぶ。

●**【参考資料】≪「八木剛助の背景」滝澤良忠著より≫**

藩主忠固が将軍に呼び出され「伊賀守(忠固)佳き軍師がいるようだの」「戦の居には伊賀守を先鋒にしようかの」その後老中主査阿部正弘も「兵学筌蹄を拝見したいものよのう」

Ⓜ1858 松平忠固老中罷免

Ⓐ1858 清次郎 27 歳 蘭語兵法書翻訳「矢ごろのかね（小銃教練）」自費出版

●**小三郎「矢ごろのかね(小銃教練）について（剛助から著作の必要性示唆）オランダ兵学校の教科書を翻訳し自費出版。日本の軍事レベル向上に強い意志の表れ。売れ行き不振であったが西洋兵学者としてデビュー出来る**

Ⓜ1859 松平忠固 48 歳死去

●藩主忠固急死、急遽 9 歳の忠札へ相続。上田藩の政局は改革派と保守派で揺れ動く？

Ⓨ1860 剛助 59 歳 武芸頭取・軍学師範・砲術師範兼務。この時期藩は西洋流銃隊調練進めるため赤松小三郎等若手を起用

Ⓐ1860 赤松小三郎 29 歳 赤松家相続

Ⓐ1861 小三郎 30 歳 小三郎へ改名

●**赤松小三郎の名前表舞台へ、**兄柔太郎会読頭取

Ⓐ1862 小三郎 32 歳 調練調方御用掛

Ⓨ1862 剛助 61 歳 藩は剛助を緊急出勤時の軍師に命じ事にあたらせる

Ⓐ1863 小三郎 33 歳 たかと結婚、松代藩実家紹介で**佐久間象山と交流**

砲術道具製作御用掛

●**藩へ軍事改革意見書提出**

Ⓚ1963 文久 3 年剛助 6２歳 小三郎 33 歳 正月剛助から小三郎宛ての書簡存在。交流の証

●**【赤松小三郎先生 現代語訳版 155ｐ～156ｐ記述】**

本書の「先生と八木剛助」の項に二人の関係を記述している

（前略）当地の形勢は種々混乱していて予測ができません。

御上京も来月二十七日の予定ですが、どうなるのか分かりません。上方筋へは先に一橋公・会津公が上京し薩摩・長州・土佐及び浪士などもそれぞれ去り、至って静かになったそうです。上京が滞りなく済み、幕府と朝廷の和合と国の平穏を祈っています。当地の辻斬りの騒ぎも少しは減っています。さてさて騒がしい世の中です。何とか早く上田に移りたいものです。いずれ今年中には移ることになります。

ご厄介様です。早々　以上

正月 25 日　　剛助

小三郎様

≪この書簡は上田市立図書館資料『赤松小三郎の書簡集』より原文写し入手≫

Ⓨ1864 剛助 63 歳 長州征伐兼助と共に江戸警備陣頭指揮

Ⓐ1864 小三郎 34 歳 1 次長州征伐 公務として江戸へ、 英国士官より騎兵学術・英語を学ぶ

Ⓨ1865 剛助 64 歳 ２次長州征伐 兼助と大阪駐屯、将軍家茂に従う、徒士頭取兼軍師役指揮権持ち大阪訓練

Ⓐ1865 小三郎 34 歳 第２次長州征伐 大阪陣中で英国陸軍兵書翻訳進める

Ⓚ剛助・兼助・小三郎の 3 人は藩命で１次征伐に江戸。2 次征伐で大阪陣中でも同じに。3 人交流可能性。日本の将来を語りあったか、山本覚馬と交流等その後の小三郎の言動に影響があったか知る由もない

Ⓨ1866 剛助 65 歳　兼助 38 歳とたけ 29 歳に初孫与一郎誕生(江戸薩摩藩邸出産、剛助薩摩藩と関係有）

Ⓐ1866 小三郎 35 歳 **従軍中に「英国歩兵錬法」翻訳出版し各藩に注目される。8 月幕府に口上書、9 月藩主には建白書**をそれぞれに改革を提言。遂には **10 月京都へ出向き兵法塾を開設する**

6. 1867～1871 別れ、二人の最後

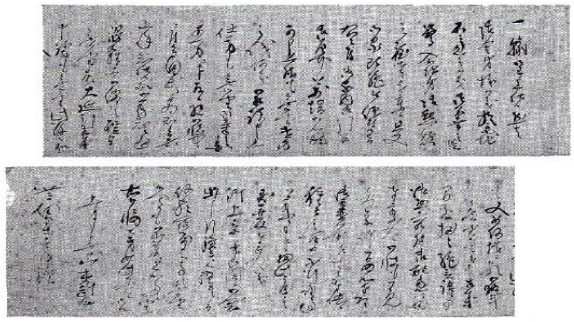
Ⓨ1867 剛助 66 歳 調練取調会頭に、藩軍の西洋化推進

Ⓐ1867 小三郎 36 歳 5 月春嶽久光に「建白七策」提出、同月洋装サーベル姿で写真撮影

9月「幕薩一和」西郷らと談合　**上田藩帰国直前に京都で暗殺**

●1867 慶應3年9月3日京都で暗殺。子が無い赤松家はお家断絶に。直系の血縁が断たれる

Ⓨ1867 ※剛助は兄芦田柔太郎に小三郎暗殺についての悔み状送る 11月 11日付け



一翰呈上仕り候。然れば御舎弟様御儀、京地に於て不慮の御義、御不幸の段、驚き入り候次第、御愁歎の程遠察奉り候。且つ又御家断絶仰せ付けられ候旨、右に付き御家内御引取り、御厄介万端御心配申し上ぐべき様も御座なく、遠方の儀、何分御相談申し上ぐ仕方も御座なく、御気の毒千万に存じ奉り候。扨て御慎み中に付き、多田氏より知らせ呉れ、承知仕り候処、御承知の通り混雑候はば、御便りも聢と御座なき故、大延引に相成り申し訳けも御座なく、此の後の処も、又如何様にか御取計ひも御座なく候はんでは、相成る間敷く、扨て〳〵言語に絶し候事、御惣容様御配慮の程、察し入り奉り候。御慎みも御免仰せを蒙せられ、一安心存じ奉り候。御霊前へ寸志供え奉り候。種々の取込み不行届きの事共、御察し下さるべく候。扨て此の度びの異変恐れ入り奉り候義、御上京并びに御固め御人数出し、引続き候騒ぎにて、何か取留め候事も御座なく候へども、落ち着かざる事に御座候。

右御悔み旁（かたがた）此の如くに御座候。以上。

十一月十一日　　八木剛助

芦田柔太郎様

【参照資料】書簡は上田市立博物館所有　現代語訳は「上田市の人物と文化」(1986 年上田市立博物館)に掲載。見守ってきた小三郎の暗殺死への無念さが伝わる

Ⓨ1868 剛助 67 歳 戊辰戦争勃発。藩士総登城の場で薩長と敢えて組むべきとし剛助の意見で幕府方ではなく官軍へ上田藩を導く。兼助越後にて戦死 40 歳、たけ 31 歳

●**1868（明治元年）戊辰戦争勃発時上田藩は幕府支持であった。藩論の変更は容易では無かったが剛助らの説得で朝廷に恭順。藩は北越戦争に参軍し上田を戦火から救う。剛助の養子兼助は砲手長で出兵し戦死**

Ⓐ1868 小三郎 京都金戒光明寺に葬られる。上田市月窓寺に髪塚の墓

Ⓨ1869 剛助 68 歳 藩校兵学局教頭

Ⓐ1869 兄柔太郎 藩校洋学寮教授

Ⓨ1871 剛助 70 歳 9月隠居、**10 月 22 日に死亡。**長女たけ 34 歳、孫与一郎 5 歳

●**八木剛助は、1867 小三郎暗殺、1868 八木兼助戦死の 3 年後藩の公務を辞しわずか 1 か月後、70 歳で死亡。42 歳で藩主忠優に抜擢され 1871 明治 4 年の廃藩置県の年 70 歳迄 28 年間、激動の幕末・明治幕開けを見届け走り抜けた**

剛助は佐久間象山より 10 歳上、勝海舟より 22 歳上、実際に教えを得た村上定平の 7 歳上、高齢の幕末志士であった

7. 資料編

現存する剛助に関する一次資料は著作類を除き極めて少ない。芦田家を始めとする関係者の保有していた書簡が上田市立博物館に寄贈され現存しているが、八木家に残されたのは一部掛軸のみであった。

その理由として考えられる事は

① 剛助死去時八木家当主は5才与一郎で剛助長女母「たけ」後見人は廃藩置県の混乱時剛助の遺品含め財産処分

② 剛助は晩年何らかの理由で書簡類を整理処分の可能性

③ 八木家の経済的事情（與一郎昭和 4 年急死）で遺品処分での現金化

これらの中で②整理処分の理由として、剛助は小三郎暗殺経緯を知り薩摩関係者から身内を守る為に、
「たけ」への口封じと小三郎との関わり示す一切の書簡類を処分したと想定出来る。
その為八木家と小三郎との親密な関係が語り継がれず且つ書簡類が皆無となったと考えられる。
そして「たけ」は明治 **33** 年 **63** 歳の死まで小三郎との関係の口封じを守り抜いた。

今回レポート作成に参照した八木剛助が登場する関係書類を列記（二次資料は比較的多い）

①八木剛助の背景 滝澤良忠 2006 年
②上田市誌人物編 明日を開いた人々2003 年
③上田市の人物と文化 1986 年 上田市立博物館
④上田藩松平家物語 1982 年 松野喜太朗
⑤あらしの江戸城 1958 年 猪坂直一
⑥上田市史 下巻 1940 年 上田市
⑦上田市立博物館レジメ資料 赤松小三郎関係系譜
⑧幕末政治と赤松小三郎 2023 年 11 月 26 日 町田明広赤松小三郎講演会資料
⑨日本を開国させた男、松平忠固 2020 年 関良基
⑩赤松小三郎研究会資料 Net
⑪赤松小三郎先生 現代語訳版 2016 年 赤松小三郎顕彰会編（大正 6 年 編集藤澤直枝 発行人八木與一郎）
⑫『上田郷友会月報 昭和 12・13 年「日本主義兵学家八木剛助先生」柴崎新一

［小三郎彩色肖像画について］
●小三郎の刀を所有していた滝澤七郎氏が
　八木正風へ写真を元にした彩色肖像画依頼
　　時期は昭和 **15,16** 年頃 **(**正風 **26** 歳頃**)**
　その後上田郷友会から市へ肖像画を寄贈
　刀と絵の色合いが同じ と小三郎顕彰会確認**(**平成 **17** 年**)**

左側 **1867** 年 **5** 月撮影、右側 八木正風による彩色肖像画

今回　私　八木晴之は
赤松小三郎彩色肖像画(八木正風作)がきっかけとなり
八木家と小三郎との関係を短期間に調べ纏めることが出来た。
あたかも小三郎に導かれるように

END

Ⅱ．幕末の薩摩藩と庄内藩の密接な関係→戊辰戦争の賞罰関係に影響を与えた

（発表者：沓掛忠さん）

＜報告の要旨＞

はじめに

明治新政府による戊辰戦争後の各藩への処分結果内容はほとんど知られていない。その理由は、推測ではあるが、戊辰戦争を勝ち抜いた新政府が、新しい国家建設に向け、国民各位に協力を望み、あえて処分内容を積極的に発表しなかったのか、あるいは、勝ち抜いた薩長土肥自身が、戦乱に伴う負の場面をあえて表に出すことをためらった結果ではないかと考える。

そんな中、今回は「薩摩藩と庄内藩の特別な関係が存在したのでは？」と思われる事柄を発表し、後日改めて「戊辰戦争と朝敵藩と賞罰」全体について触れてみたいと考えている。

1. 庄内藩の戦死者が非常に少なかった

・奥羽越列藩同盟軍の中で庄内藩は、非常に優れた洋式兵装の軍であり、実質的な同盟のリーダーともいわれている。

・戦死者合計52名。内、近隣の秋田領内での戦死者は29名。よって純粋に庄内藩内での戦死者は23名。（明治２年、庄内藩が招魂社に祀られる名簿を兵部省に提出した数字による）

２．酒田の本間家（庄内藩の大富豪）分家の本間軍兵衛

・江戸で蘭学、英語を学び、勝海舟、ジョン万次郎、福澤諭吉らと交流があった。また、幕府派遣の「遣欧使節団」に随行した。

・薩藩の家老小松帯刀に、「薩州商社案」を上申した。この草案は、日本で一番早く「株式会社」を考えたことを物語る資料として現存する。

・グラバーが軍兵衛を薩藩の家老小松帯刀に推薦し、藩内の薩摩藩開成所の英語教師になり、子弟に英語を教えた。その教え子たちが慶応元年（1866年）に薩摩藩によるイギリスへの使節団に選ばれるなど、薩摩の近代化に尽くした。

・葛飾北斎から絵を習い、北陽と号した。

・最後は薩摩藩のスパイと疑われ、新庄藩の手で毒殺された。

・以上のことから、西郷隆盛は北陸道鎮圧軍司令官黒田清隆に「黒田君、羽州庄内、特に酒田湊は本間北陽先生の生まれた土地だ。政府軍に勝ちに乗じた醜行があってはなりませんぞ」と語ったと言われる。

3. 当時の日本の国内状況

・明治維新の約100年前の江戸中期は、幕府の鎖国政策のため、外国との貿易が禁じられていたが、薩摩藩は、九州の南端に位置し幕府の目が届かないことを利用して、盛んに密貿易を行っていた。

・薩摩藩第８代藩主島津重豪（しげひで）が、商業を強力に推進するために、優秀な商人を全国から募集した中で、庄内出身の紅花商人**岩元源衛門**が、選ばれて薩摩に移住した。（「山形屋」（百貨店）のはじまり）

・源衛門は薩摩の商品（海産物、砂糖、紅花関連商品など）を、全国に販売し、更に北前船の寄港地富山で仕入れた薬や、蝦夷から仕入れた昆布を全国販売した。更に昆布は沖縄経由で中国に販売し、その資金で上海から一万丁規模の小銃を買い付けるなど、薩摩藩は幕末の激動期に備えた。そして薩摩藩の繁栄は岩元源衛門（庄内藩出身）なくして成り立たなかったことを幹部クラスの人間も良く理解していた。

４．戊辰戦争と庄内藩の処分

・庄内藩軍は、「清川の戦い」で新政府軍（奥羽鎮撫軍）を撃退するなど、新庄近辺の戦いでは無敗を誇った。最後は、無敗のまま降伏した。しかしその後の処分は、同じ「朝敵」の会津藩とは大きく異なる寛大な処分だった。

① 庄内藩取り潰しの案については、西郷隆盛が薩摩藩の財政改善に大きく貢献した庄内藩を思い、「庄内藩を潰すぐらいなら、おいどんを殺してくれ」と発言した

② 「首謀反逆者」については庄内藩の申告通りに既に戦死していた家老の石倉蔵衛門で良しとした

③ 城の明け渡しの際に、藩士に帯刀が認められた（非常に珍しい事例）

・処分の比較

庄内藩　17万石→12万石へ（30％削減）
会津藩　23万石→下北半島「斗南（となみ）藩・・・新規」3万石（87％削減）
※ほとんど作物が育たない不毛の地である青森県下北半島への強制移住であった
長岡藩　7．4万石→2．4万石（68％削減）
以上

Ⅲ．2024 年　第 11 回赤松小三郎講演会（案）～関良基さん

日時：2024 年 11 月 23 ないし 24 日（予定）　午後 2 時～4 時 30 分
（→2024 年 11 月 4 日（月・振替休日）に決定しました）
第一部　基調講演：田中優子氏（前法政大学総長、法政大学名誉教授）
午後 2 時～午後 3 時
演題「赤松小三郎から見た江戸時代」
第二部　パネルディスカッション
午後 3 時 10 分～午後 4 時 10 分
質疑応答（午後 4 時 10 分～4 時半）
テーマ：「赤松小三郎と江戸の民主主義」（仮）
パネリスト：田中優子氏、橋本真吾氏（北里大学講師）
コーディネーター（ファシリテーター）：関良基氏

Ⅳ．「英雄たちの選択」と赤松小三郎～報告：滝澤進さん

去る3月27日（水）放送のNHK・BS「英雄たちの選択」（「博覧会で京都を救え～八重の兄山本覚馬～」）において、赤松小三郎が大きく紹介された。これは、全国放送としては初めてのことで、小三郎の歴史的な再評価を進める上で大いに意義があったものと考えられる。

◎概要
放送日時　2024年3月27日（水）午後8時～9時
番組　「英雄たちの選択」（博覧会で京都を救え～八重の兄山本覚馬～）
主な出演者　磯田道史（歴史家、国際日本文化研究センター教授）
石井章一（国際日本文化研究センター所長）
岩下哲典（東洋大学教授）
吉海直人（同志社女子大学特任教授）（ビデオ出演）

＜その他＞

○関良基さんの新刊「江戸の憲法構想」の案内
2024年3月発売　作品社　2,200円（税別）

○事務局よりお知らせ
次回の第48回研究会は、2024年6月8日（土）開催予定です。
詳細が決まり次第にHP・メール等でご案内します。

（記録：荻原貴）